

## ゼカリヤ書5-6章 「全地の面への裁き」

### 1A 全地にある悪 5

1B 巻き物の中の呪い 1-4

2B エパ枳の中の女 5-11

### 2A 主の到来 6

1B 御怒りを完了させる戦車 1-8

2B 大祭司の王位 9-15

## 本文

私たちのゼカリヤ書の学びは、八つの幻であります。谷間に赤い馬に乗っておられる方の幻から始まり、四つの角と四人の職人、エルサレムを測る測り縄、そして二人の指導者に対する幻でした。大祭司ヨシヤは、汚れた服を礼服に取り替えていただき、主の宮での礼拝を任されました。総督ゼルバベルは、主の御霊によって神殿の建設を完成させることのできる恵みが与えられました。そして、二人が将来の神殿、メシヤが来られて建ててくださる神殿を証する油注がれた者だということでした。このように、ゼカリヤの見た幻は、そこにいたエルサレムへの帰還民、神殿の再建のみならず、その背後にある神が究極的に完成させてくださるご計画、終わりの日の幻もあるのです。このことに、どれほどエルサレムの帰還民は慰められたことでしょうか。彼らは小さな集団であり、外敵に囲まれ、抑圧されて、そしてその再建事業は遅々として進まず、膨大な瓦礫に取り囲まれていました。そこに、主ご自身が全面的に助けてくださっている、この全世界を巻き込んで助けてくださっていることを知るのです。

### 1A 全地にある悪 5

主が、ご自分の救いの働きを完成されるに当たって、私たちが知らなければいけない、もう一つの厳しい真実があります。それは、試される期間があるということです。それは、主に属する者とそうでない者が選り分けられる時でもあるということです。神の共同体、神の家においてはこれまでそのことが頻繁に起こっていました。イスラエルの荒野の旅で、イスラエルの民に属していないのにエジプトを出た時に混じってやってきた者たちが、問題を引き起こしていました。エジプトにある食べ物が増えたいと欲望に駆られて、それがイスラエルの家全体に広まってしまいました。カデシュ・バルネアにおいては、約束の地に入ることを拒んだので、その世代の全体が裁かれたのです。そして新しい世代のみが約束の地に入れると神は宣言されました。

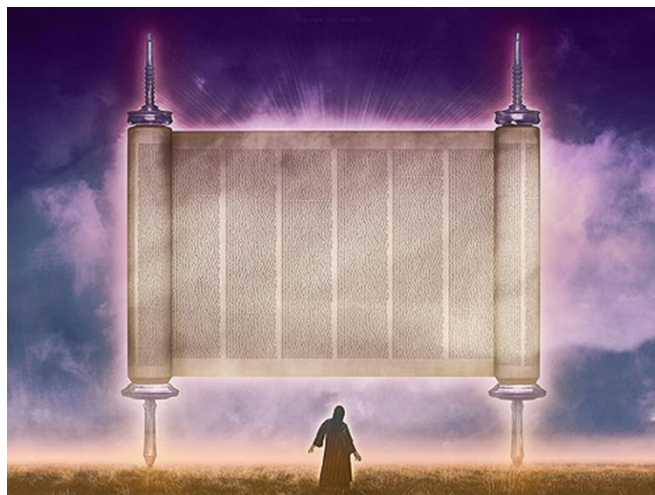
教会においては、天の御国の奥義の喩えの中で、麦畑の中に毒麦が蒔かれたという話があります。収穫の時に、毒麦は刈り取られて、火の中に燃やされます。良い麦が収穫されて、倉の中に収められます。イエス様は、「招待される者は多いが、選ばれる者は少ないのです。(マタイ

22:14) 」と言われました。そして使徒たちの手紙や、ヨハネによる黙示録には、数多く偽教師の出現、偽の教えによって信仰から離れることについて語っています。このような惑わしがあり、そして試練があるのですが、ゆえに、神の恵みによって、しっかりと信仰に立つのだということを覚えていなければいけません。

#### 1B 巻き物の中の呪い 1-4

1 私が再び目を上げて見ると、なんと、巻き物が飛んでいました。2 彼は私に言った。「何を見ているのか。」私は答えた。「飛んでいる巻き物を見えています。その長さは二十キュビト、その幅は十キュビトです。」

金の燭台とその背後にある二本のオリーブの木の幻を見た後に、ゼカリヤは、巻き物が飛んでいるのを目撃しました。巻き物は、当時の書物の形態であり、私たちが手にしている本というのは、かなり後で作られたもので、当時は羊皮紙などに文字を書き記し、それを巻いて使っていました。そして、神の律法、神の教えは巻き物に書き写していました。しかし、ここでの特徴は、既に巻き物が大きく開かれているということです。主の語られた言葉が、大きく、広く、実に全地に渡り、広げられたということです。ですから、誰もが隠れることができない、全ての行ないが明らかにされるということでもあります。終わりの日に近づくにつれて、人々が心の中で思っていたこと、隠れて行なっていたことが露わにされていきます。



その広げられた巻き物の大きさが、長さが二十キュビト、幅が十キュビトです。およそ長さが9 呎、幅が 4.5 呎です。この寸法は、ゼカリヤには馴染みが深かったでしょう、聖所の寸法なのです。モーセに主が造りなさいと命じられた聖所には、日毎に、週毎に、祭司が主の前に出て奉仕をします。燭台の灯を整え、備えのパンを取り替えます。そしてそのパンをそこで食べます。大祭司は、香壇で香を炊き、贖罪日には垂れ幕に入って、至聖所の中でイスラエルの罪の贖い、清めを行います。至聖所は、十キュビトの正方形ですが、その手前の聖所は二対一の二十キュビト、十キュビトなのです。したがって、ここには神の教えと共に、神がおられるところ、神の聖所が示されているのです。パウロは、「ですから、律法は聖なるものであり、戒めも聖であり、正しく、また良いものなのです。(ローマ 7:12)」と言いました。

主が来られるということは、主の聖所が来ると言っても過言ではありません。実に天のエルサレムは、天から神の幕屋、聖所が新しい地に降りてくるのです。そして人々は、その都の中に住むこととなります。その聖さに自分もあずかるからこそ、その中に住めます。聖なる方が住まわれるのに、その聖さにあずかっていないならば、呪いを受ける、取り除かれるということとなります。

3 すると彼は、私に言った。「これは、全地の面に出て行くのろいだ。盗む者はだれでも、これに照らし合わせて取り除かれ、また、偽って誓う者はだれでも、これに照らし合わせて取り除かれる。」

ここに書かれている呪い、盗む者、偽って誓う者が取り除かれるということです。十戒は、二枚の板がありますが、一枚は第一から第五、もう一枚は第六から第十まであります。盗みは、二枚目の真ん中、第八戒です。偽りの誓いとは、主の御名をみだりに唱えることなので、一枚目の真ん中、第三戒です。そこでこれは、真ん中の戒めを二つ取って、十戒の全て、律法の全てを意味するという解釈があります。それも、その通りでしょう。

あるいは、ユダヤ人の中でこの二つの罪が特徴的だったのではないかと思います。盗むとは何か？ 帰還したユダヤ人が再建した神殿の中で、いけにえを捧げていましたが、次第に、主への捧げ物が、欠点のある動物、残り物になっていったということが、マラキ書に記されています。そして、主から与えられた十分の一を捧げていないことがありました。こう書いてあります。「マラキ 3:8-9 人は神のものを盗むことができようか。ところが、あなたがたはわたしのものを盗んでいる。しかも、あなたがたは言う。『どのようにして、私たちはあなたのを盗んだでしょうか。』それは、十分の一と奉納物によってである。あなたがたはのろいを受けている。あなたがたは、わたしのものを盗んでいる。この民全体が盗んでいる。」主のものになっているのに、それをお返ししないということで盗みだと言っているのです。それと、偽って誓うということも直接、つながっています。主の御名を呼び求めながら、実際は主につながっている生活をしていない、二重基準の生活になっているということです。

今、ここで「全地の面に出て行くのろいだ」とあります。帰還したユダヤ人だけでなく、世界中に散らばっているユダヤ人、神の民のことを念頭に置いています。彼らが、神の民であるはずなのに、神に対して偽っているような生活をしているならば、取り除かれてしまうということです。終わりの日は、イスラエルにとって試練の時であります。反キリストが台頭して、彼らを迫害する時であります。そのような試練において、世に属している者たちは、たとえユダヤ人であっても選り分けられるということです。エゼキエル書には、「あなたがたのうちから、わたしにそむく反逆者をえり分ける。(20:38)」とあります。反キリストの前で打たれ、倒れてしまいます。

午前礼拝でも話しましたが、主は、世界を裁かれるに当たって、ご自分の家を初めに裁かれます。第一ペテロ 4 章 17 節にそのことが書いてあるし、使徒パウロは、テサロニケ第二 2 章 3 節で、「まず背教が起こり、不法の人、すなわち滅びの子が現れなければ、主の日は来ない。」と言いました。そして、終わりの日には「2テモテ 3:5 見えるところは敬虔であっても、その実を否定する者になる」と言っています。教会は、世から聖め別たれた存在ですが、その中に世があるならば、その世を取り除かれるということです。

4 「わたしが、それを出て行かせる。・・万軍の主の御告げ。・・それは、盗人の家にはいり、また、わたしの名を使って偽りの誓いを立てる者の家にはいり、その家の真中にとどまり、その家を梁と石とともに絶ち滅ぼす。」

これはちょうど、初めの過越、すなわちエジプトの家々で、初子が殺された時と同じです。死の御使いが家々に入って、その中の初子を殺しました。子羊の血が鴨居と門柱に塗られているところは、その裁きは過越しました。けれども今、その血が塗られていない、契約の民となるための血がない状態で、神の裁きが来たのです。「ヘブル 10:29 まして、神の御子を踏みつけ、自分を聖なるものとした契約の血を汚れたものとみなし、恵みの御霊を侮る者は、どんなに重い処罰に値するか、考えてみなさい。」契約の血、主がご自分の御子の血を流したところまで行われた、その究極の贖いをないがしろにするのであれば、残るは怒れる神の御手しかないということであります。

## 2B エパ枘の中の女 5-11

5 私と話していた御使いが出て来て、私に言った。「目を上げて、この出て行く物が何かを見よ。」  
6 私が、「それは何ですか。」と尋ねると、彼は言った。「これは、出て行くエパ枘だ。」そして言った。「これは、全地にある彼らの罪だ。」

次の幻は、「エパ枘」です。エパとはヘブル語で、量を測るはかりで、23 כףです。そしてそのエパ枘が、「全地にある彼らの罪だ」というのです。これは、不正の富を築いていく商業主義のことを意味しています。主は、律法の中で強く、重りや測りを変えてはいけなことを戒めました。「申命記 25:14 あなたの家に大小異なるエパを持っていてはならない。」しかし、イスラエルは不正の取引をしていました。「アモス書 8:5 あなたがたは言っている。「新月の祭りはいつ終わるのか。私たちは穀物を買りたいのだが。安息日はいつ終わるのか。麦を売りに出したいのだが。エパを小さくし、シェケルを重くし、欺きのはかりで欺こう。」ユダヤ人は、エルサレムに帰還後、捕囚前に行っていた偶像礼拝はさすがに止めましたが、安息日をもないがしろにした商売については、変わらずに行なっていく傾向がありました。ネヘミヤ記 13 章で、安息日に商売をしている者たちを、ネヘミヤ



ヤが強く咎めている箇所があります (13:15-18)。そこには、なんとツロから来た商売人もおり、エゼキエル書でその世界貿易でツロが裁きを受けているところを見ると、彼らの中に罪があったと呼ばれて、しかるべき状況があったと言えます。

7 見よ。鉛のふたが持ち上げられ、エパ枘の中にひとりの女がすわっていた。8 彼は、「これは罪悪だ。」と言って、その女

をエパ枘の中に閉じ込め、その口の上に鉛の重しをかぶせた。

鉛の蓋の中には、御使いが「罪悪だ」と叫んだ、一人の女がいました。これは、明らかに不道徳な女、淫婦がいたことを示しています。ここで私たちが思い出さないといけないのは、バビロンの存在です。バビロン捕囚になる前から、彼らはバビロン発祥の天の女王を拝んでいました。そして、バビロンに捕え移されました。バビロンは、2章で学びましたように、そこは世の始まりの時から神の反抗したところであり、エバを惑わした悪魔から始まり、ニムロデの建てた町々、そしてバベルの塔がありました。そしてバビロンにおいては、偶像礼拝が盛んであり、また巨額の富がありました。それは滅びましたが、その流れはずっと続いており、それがローマ帝国にも現れ、そして終わりの時の明らかな形で出現します。私たちはこのことを、黙示録17章と18章の、大淫婦である大バビロンへの裁きで学びました。

9 それから、私が目を上げて見ると、なんと、ふたりの女が出て来た。その翼は風をはらんでいた。彼女たちには、こうのとりの翼のような翼があり、彼女たちは、あのエパ枘を地と天との間に持ち上げた。10 そこで私は、私と話していた御使いに尋ねた。「あの者たちは、エパ枘をどこへ持って行くのですか。」11 彼は私に言った。「シヌアルの地で、あの女のために神殿を建てる。それが整うと、その台の上に安置するためだ。」

二人の女が出て来て、翼を持っています。そして「風をはらんでいた」とありますが、霊のことでしょう、霊の存在です。私たちが普通、天使というと女性のような天使を思い出すでしょう。けれども、聖書において天使は男性名詞であり、非常に力強く、一人の天使が国を動かすほどの主権と支配を持っています。しかし、なぜここでは女性なのか？これはまさに、女性の天使のような姿へ異教に出てくるそれであり、地上から出たものです。その証拠に、「あのエパ枘を地と天との間に持ち上げた」とあります。天と地の間ではなく、地と天の間なのです。地上にあるものを、天に引き上げようとする試みです。これが宗教です。しかし、まことの神は天からの方です。天から地に降りて来くるのであり、天に属します。

そして、持って行く先は「シヌアルの地」です。そこはバベルの塔が建てられた土地であり、バビロンの国の場所でもあります。そこに「神殿を建て」とあります。宗教また富が混ぜ合わさっている、黙示録17-18章に出て来る、大淫婦バビロンです。黙示録によれば、この女は滅びます。17章では、獣とその他の王たちによって滅ぼされます。宗教のバビロンです。そして18章は、一日にして倒れます。商業のバビロンです。そして、ゼカリヤ書2章でも、黙示録18章でも、主の民はバビロンから出て来なさいという呼びかけがあるのです。それは滅び、倒れるのです。

神の民にとって、富はいつも誘惑であり、挑戦です。富に仕えるのと、主に仕えるのを同時にできないとイエス様が言われました。だからといって、それは富から離れよということではありません。

富という、とてつもない力を持っている存在を、主に仕える中で管理する、支配するということです。ちょうどそれは、危険物を取り扱っている人が、それを厳重に管理することによって、良い目的のために使うことができるのと似ています。富という力を、神の力によってさらに抑えるのです。そして、神の栄光のために富を用います。それと偶像礼拝は密接につながっています。富があるために、神に頼る必要を感じなくなるからです。そして、自分の願っていること、考えていることに仕えてくれる神を求めるのです。キリストの名を唱えながら、実は異なるイエス、偶像にしか過ぎないことがあります。イエス様が偽預言者について警告した時に、主よ、主よという者が、全て天の御国に入ることはないと言っていました。

使徒ヨハネは、「すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。(1ヨハネ 2:16)」と言いました。終わりの日に近づくにつれて、私たちはますますこの誘惑を強く受けるようになります。だからヨハネは、「世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人にうちに御父を愛する愛はありません。(同 15 節)」と言いました。この世は過ぎ去ります。けれども、神のみこころを行なう者は生きながらえます(同 17 節)。

## **2A 主の到来 6**

### **1B 御怒りを完了させる戦車 1-8**

このようにして、試みの時をユダヤ人は通ります。しかし、それは救いの時でもあります。試みを経て、その後に主の与えられるものは、救いだからです。主はこれを、「ヤコブにとっての苦難」と呼ばれました。「エレミヤ 30:7 ああ。その日は大いなる日、比べるものもない日だ。それはヤコブにも苦難の時だ。しかし彼はそれから救われる。」

キリスト者の世の終わりの時には、同じように試みを受け、かつ忍耐すれば救いに至ります。人々が、キリストの名のゆえに私たちを憎み、多くの人がつまずき、互いに裏切り、憎み合うとイエス様は言われました。そして偽預言者も多く起こるので、惑わされます。不法がはびこるので愛が冷えます。私も、ここ数年、あまりものキリスト教の指導者による罪や不法を見聞きして、躓きそうになりました。しかし、イエス様は言われます。「最後まで耐え忍ぶ者は幸いです。この御国の福音は全世界で宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから、終わりの日が来ます。(マタイ 24:13-14)」



そこで最後の幻は、初めの幻の訴えに対して、主がお答えになるものです。異邦の諸国によっ

て抑えつけられている残りの民、その訴えに対して神が憤りをもって、妬みをもってエルサレムを愛されます。彼らを踏みにじっている異邦の諸国に対して、彼らを踏みつける戦車を遣わされます。

1 私が再び目を上げて見ると、なんと、四台の戦車が二つの山の間から出て来ていた。山は青銅の山であった。2 第一の戦車は赤い馬が、第二の戦車は黒い馬が、3 第三の戦車は白い馬が、第四の戦車はまだら毛の強い馬が引いていた。

第一の幻では、谷底で、ミルトスの木が生えているところであり、そこがもしかしたら、ケデロンの谷かもしれないと少し言及しました。もしかしたら、この幻でもケデロンの谷かもしれません。二つの山は、一方が東にあるオリーブの山、もう一方が西にある、神殿が再建されているモリヤ山です。そして「山」というものには、権威や力の象徴があります。そしてここでの特徴は、山が「青銅」であるということです。聖書では青銅は、裁きを表しています。神の宮における礼拝の初めが、青銅の祭壇ですが、それは罪が裁かれている、そこで神の裁きの火が燃やされていることを意味します。ここから出て行っているのは、神の裁きを執行するために戦いに出て行っている戦車の姿です。

黙示録 6 章にも、似たような幻があります。小羊なるイエス様が封印を解き、それで白い馬、赤い馬、黒い馬、そして青ざめた馬が出てきたのを見ます。白い馬は勝利から勝利へ進むものであり、それは再臨のキリストを真似た偽物、反キリストであることが分かります。赤い馬は、火のようなもの、戦争による火災であり、また流血の色です。そして黒い馬は飢餓状態になって顔が黒ずんでいることを示していて、それは物品が事欠いて、物価が高騰して、人々が購入できなくなったためです。そして青ざめた馬は、剣、飢饉、死病によって人々が死んでいく姿です。

4 私は、私と話していた御使いに尋ねて言った。「主よ。これらは何ですか。」5 御使いは答えて言った。「これらは、全地の主の前に立って後、天の四方に出て行くものだ。6 そのうち、黒い馬は北の地へ出て行き、白い馬はそのあとに出て行き、まだら毛の馬は南の地へ出て行く。7 この強い馬が出て行き、地を駆け巡ろうとしているのだ。」そこで彼が、「行って、地を駆け巡れ。」と言うと、それらは地を駆け巡った。

この二つの山がオリーブ山とモリヤ山であれば、その谷間は北と南に走っているので想像しやすいです。黒い馬と白い馬が北の地に行き、まだら毛の馬が南に行くとあります。イスラエルにとって、自分たちはこれまで北と南の勢力に挟まれていました。南は古代からずっと、エジプトでした。変わりなくエジプトでした。そして北は、アッシリヤから始まり、イスラエル王国はアッシリヤによって滅びました。それからバビロンです。ユダ王国がバビロンに捕え移されました。いつも、北と南に挟まれているけれども、主はその二方面に対して戦ってくださいます。イザヤ書 19 章には、主がエジプトに対して裁きを行なうけれども、エジプト人が主に救いを求めること、それからアッシリヤからエジプトという広範囲に、主を礼拝するものたちがイスラエルに集まって来ることが示され

ています。

主は、このようにして私たちがたとえ反対の勢力に囲まれても、必ずや主に屈服するように仕向けてくださるのです。パウロは問題が四方から押し寄せて来る時でも、自分たちからイエスの命が明らかにされると宣言しています。「2コリント 4:8-10 私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれていますが、行きづまることはありません。迫害されていますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。いつでもイエスの死をこの身に帯びていますが、それは、イエスのいのちが私たちの身において明らかに示されるためです。」

ところで、赤い馬がどこにいったか分かりませんが、7 節の「この強い馬」がそうかもしれません。これは地を駆け巡るので、全地において戦争が引き起こされている様子を描いているものと思われます。私たちは、12 章から終わりの日における世界規模の戦いを読むこととなります。世界の諸国の軍隊が、エルサレムに向かって攻めて来る幻です。しかし主が到来し、一気に彼らを滅ぼされます。それでエルサレムは救われます。

8 そのとき、彼は私にこう告げた。「見よ。北の地へ出て行ったものを。それらは北の地で、わたしの怒りを静める。」

北の地に行ったものによって、神の怒りが静まったとあります。これは、バビロンです。バビロンに対する怒りをもって、神はご自分の怒りを満たされたということです。エレミヤ書にも、徹底的なバビロンへの裁きが書かれており、ハバクク書など、バビロンへの裁きをもって神の怒りが静まる様子が書いてありますし、そして黙示録もバビロンへの裁きをもって、イエス様が再臨されることが書かれています。

怒りを静めるという言い回しは、「わたしの霊を休める」というのが直訳です。主は、ご自分の目的を果たすまでは、ずっとその情熱は続いているということです。主は、シオンのためには黙っていないと、イザヤ書の中で言われました。「62:1 シオンのために、わたしは黙っていない。エルサレムのために、黙りこまない。その義が朝日のように光を放ち、その救いが、たいまつのように燃えるまでは。」主へのエルサレムへの情熱は、このようにして続くのです。

主は、このような情熱をもって私たちに関わります。「ヘブル 4:10-11 神の安息にはいった者ならば、神がご自分のわざを終えて休まれたように、自分のわざを終えて休んだはずです。ですから、私たちは、この安息にはいるよう力を尽くして努め、あの不従順の例にならって落后する者が、ひとりもないようにしようではありませんか。」この安息とは、天に入ることです。それまでは、救いに向かってひたすら努力している、神の救いの御働きの中で自分も関わっていくということです。そしてキリストの形が自分のうちに造り上げられていくこと、キリストの体が建て上げられていくこ



と、福音が世界に宣べ伝えられていくこと、神の国が広がっていくことを、熱く求めていくということです。それまでは、霊は休まらないからです。

## 2B 大祭司の王位 9-15

こうして、主がエルサレムを再び選ぶために、再び来られること。そしてエルサレムを踏みにじっていた諸国の勢力に対して主が戦われたことを見ました。そして次は、幻ではありません。一つのデモンストレーションを、行なうように神が命じられます。ここで、主が到来し、ご自分の国を地上に建てられるに当たって、大祭司ヨシヤが戴冠式を受けることによって、王である祭司であるメシヤがエルサレムに着座されることを示していきます。

9 ついで私に次のような主のことばがあった。10 「捕囚の民であったヘルダイ、トビヤ、エダヤからささげ物を受け取り、その日、あなたはバビロンから帰って来たゼパニヤの子ヨシヤの家へ行け。

ゼカリヤは、三人の帰還民からの捧げ物を受け取るように命じられます。「ヘルダイ、トビヤ、エダヤ」がその名前ですが、ヘルダイは「力あるもの、健全なもの」という意味です。トビヤは「主は慈しみ深い」という意味です。そしてエダヤは、「主は知りたもう」という意味です。捧げ物を受け取ってから、ゼパニヤの子ヨシヤの家に行くのですが、ヨシヤは「主の寵愛」という意味です。力あり、健全な方、慈しみ深い方、知っておられる方、そして、主の寵愛であります。なんと美しい名前の人々が集まったことでしょうか！

11 あなたは金と銀を取って、冠を作り、それをエホツァダクの子、大祭司ヨシヤの頭にかぶらせ、  
12a 彼にこう言え。



ゼカリヤは、なんとその帰還民からの捧げ物、金や銀ですが、それを使って冠を作りなさいと命じられています。彼はそれだけ細工をする技術があったのでしょうか、このヨシヤが細工のできる人だったかもしれません。彼が命じられたのは、かなり装飾のある冠です。ヘブル語では、一つの冠ではあるものの、複数の威厳や威光が表れているもの、王冠が折り重なっているものという意味合いがあります。イエス様が再臨される時の姿を思い出します。「黙示 19:12 その目は燃える炎であり、その頭には多くの王冠があつて、ご自身のほかだれも知らない名が書かれていた。」

そもそも、これは不具合な象徴なのです。祭司は王でないからです。旧約聖書をよく読んでいる人なら、これほど違和感を抱くような行動はないでしょう。ダビデの末裔が王冠を戴くべきであり、

レビの子アロンの末裔である祭司とは、明確に区別を行なっています。これに違反した王が何人も現れました。例えば、サウル王が預言者サムエルを待たず、自分で全焼のいけにえをささげました。またウジヤ王は神殿の内庭の中に入って、いけにえを捧げようとしたので、らい病にかかりました。しかし、主が、このことをヨシュアに対して行なうようにゼカリヤに命じられました。それは、今は天におられて私たちのために執り成しておられる偉大な大祭司、イエス・キリストが地上に戻られて、確かに王の王として戴冠されることを表しているからです。

ヘブル書には、祭司であるのに王であるという、唯一例外的な存在が話題にされています。「メルキゼク」です。アブラハムがロトを救出するためにダマスコの北まで行って四人の王から奪い取った後に、「シャレムの王メルキゼクはパンとぶどう酒を持ってきた。彼はいと高き神の祭司であった。(創世 14:18)」とあります。「シャレム」はエルサレムのことです。そこにいる「メルキゼク」、つまり義の王です。そしていと高き神の祭司です。彼がパンとぶどう酒を持ってきて油ハムを祝福しているのです。そしてアブラハムは、彼に自分の十分の一を捧げています。この王であり祭司である存在について、詩篇はメシヤとして教え、「あなたは、メルキゼクの例にならい、とこしえに祭司である。(110:4)」と言っています。

12b『万軍の主はこう仰せられる。見よ。ひとりの方がいる。その名は若枝。彼のいる所から芽を出し、主の神殿を建て直す。』

メシヤ預言は、「見よ。ひとりの方がいる。」から始まります。主イエスが十字架刑に処せられる前、総督ピラトが同じ言葉を発しました。「さあ、この人です。"Behold the Man."(ヨハネ 19:5)」そして「その名は若枝」です。イザヤ書、エレミヤ書、エゼキエル書において、これがメシヤの称号として何度も表れます(例: イザヤ 11:1、エレミヤ 23:5、エゼキエル 17:22)。そして、その多くがダビデの座に着かれる、王なるキリストの姿です。そして、この方が「主の神殿を建て直」されるのです。これは、主の御霊によってゼルバベルが率いている再建工事が完成するという励ましもありますが、終わりの日にメシヤご自身が、神の国における神殿を建てられる、という将来に裏打ちされたものなのです。エゼキエル書 40 章以降に、その神殿の幻を詳しく見ることができます。

13 彼は主の神殿を建て、彼は尊厳を帯び、その王座に着いて支配する。その王座のかたわらに、ひとりの祭司がいて、このふたりの間には平和の一致がある。』

ここの「尊厳を帯び」ているという尊厳は、「栄光」と訳すことのできる言葉です。キリストは、「神の栄光の輝き、また神の本質の現われ」である尊厳です(ヘブル 1:3)。この方が確かに王座に着いて支配されます。イエス様が支配されます。しかし、この王は同時に、祭司でもあられます。新改訳では「王座のかたわらに、ひとりの祭司がいて」と訳されていますが、他の訳では「王座におられるひとりの祭司であり"He shall be a priest on His throne."」となっています。王であり、かつ

祭司なのです。そこで、この二つの職の一致を、「このふたりの間には平和の一致がある。」と表現しています。

これは帰還民に対して、主は深い、深い慰めを与えています。神の神殿での礼拝、また私たちの礼拝が、イスラエルまた国々を治める支配者となるということは、全世界が礼拝王国となることを意味します。いかがでしょうか、彼らは内心の信仰によって、イスラエルの神が王であられ、主であることを信じています。けれども、外の世界はこの方に服しているどころか、無関心であり、反対し、抑圧しています。神殿と、世の支配との間に平和はないのです。いつも、この二つが葛藤しています。私たちが、そうでしょう。教会という存在は貴いですが、私たちの内心の信仰が最も完全な形で守られるのは、礼拝です。ここで、全ての思いと心を込めて、イエスが主であることを告白できるからです！しかし、私たちは未だ世の支配を受けています。万物の全てのものが、キリストに従っているのではないのです。しかし、神がキリストにあって、全てのものを一つに集める時が来るのです。「エペソ 1:10 時がついに満ちて、この時のためのみこころが実行に移され、天にあるものも地にあるものも、いっさいのものが、キリストにあって一つに集められることなのです。」教会の外に出ても、未だ教会のような状態です。礼拝をしていることと、世界において生活していることとの区別が無くなります。それは大祭司なるお方が、王の王となられるためです。

14 その冠は、ヘルダイ、トビヤ、エダヤ、ゼパニヤの子ヨシヤの記念として、主の神殿のうちに残ろう。

神殿に、この冠が残されます。その度に、必ずやこの神殿の先にはメシヤによる救いがあることを思い出させているのです。私たちにも、必ずや御国が到来することを、毎週の礼拝の中で思い出すのです。

15 また、遠く離れていた者たちも来て、主の神殿を建て直そう。このとき、あなたがたは、万軍の主が私をあなたがたに遣わされたことを知ろう。もし、あなたがたが、あなたがたの神、主の御声に、ほんとうに聞き従うなら、そのようになる。」

ここの「遠く離れていた者たち」というのは、異邦の諸国のことです。主の神殿のために、金や銀を携えてきます。バビロンから来た者たちが、バビロンにある金銀を主の栄光のために携えてきたように、世界中の者たちが携えて来るのです。「イザヤ 60:4-5 目を上げて、あたりを見よ。彼らはみな集まって、あなたのもとに来る。あなたの息子たちは遠くから来、娘たちはわきに抱かれて来る。そのとき、あなたはこれを見て、晴れやかになり、心は震えて、喜ぶ。海の富はあなたのところに移され、国々の財宝はあなたのものとなるからだ。」いかがでしょうか、世界にあるもの、その財宝も主のものとして、贖われる時が来ます。日本では、多大な富が神社仏閣に捧げられています。しかし、それはそれ、私たちは私たちと分けてはいけません。それらの荘厳な趣は、いつか主

のために用いられる、主の栄光のために捧げられることになるのです。将来は、異教と主のものという区別はなくなるのです、全てのものが主のものとなります。そのために、今は異教のもの、世俗のものであっても贖われるのです。

そして、「このとき、あなたがたは、万軍の主が私をあなたがたに遣わされたことを知ろう。」とあります。これはゼカリヤ書で繰り返し出てきた言葉です。ここの私は、ゼカリヤのことではありません。主の使いのことです。主の使いが、キリストご自身ではないかというのはここを見るとわかります。主に遣わされた方であり、かつこの方は主ご自身なのだということです。

そして最後に、「もし、あなたがたが、あなたがたの神、主の御声に、ほんとうに聞き従うなら、そのようになる。」と条件を付けています。これらの優れた約束は、主の御声に聞き従うからこそ、自分のものとなります。主の世界に一步、信仰をもって踏み出さなければ、これらの世界は自分のものとはならず、蚊帳の外に置かれます。しかし、一步を踏めば必ずや、自分のものとなります。